

獨乙文學を主として歐洲文學の思想を我國に紹介する事を勉め、又和文の研究に力を致したるは忘れてならぬ事あり、其他『學藝志林』『東洋學藝雜誌』『現今の科學の一方に傾きたれど』『出版月評』『文』學』もしくは女學に關する『女學雜誌』いらつめ、『貴女の友』等は前後に出で、多少新文學を獎勵するの媒介を爲したりき。

興國文學の勃

終に臨んで一言せざるべからざるは國文學(寧ろ古文學と稱するを適當なりとするにもせよ)の勃興したりし事是なり、蓋し先に『かなのくわい』起りて漢文熱を冷却せしめしこと、文部省令出で、公私諸學校に國語科を置きたること、與かつて其大誘因を爲したるは疑ふべからず、此時にあたり大に全力を盡して之を興起せしめ、之を隆盛ならしめ、之を普及せしめたるは、嘗て大學總理加藤弘之氏の時に置かれし古典講習科出身の人々を

以て其最ありとすと謂はざる可からず、見よ彼の

小中村義象

落合直文

萩野由之

佐々木信綱

諸氏の校註編著せし

日本文學全書

日本文典

新撰歌典

歴史讀本

日本歌學全書

歌の栞

等が如何に文學界を利益せしめしかを。

文法書

是より先き日本文法書の著者としては

中根淑

物集高見

チャムパーレン

諸氏あり。余も亦小中村落合兩氏の日本文典出づるに少し後れて『和文典』を著はし試みたり。これのみならず辞書には

物集高見

近藤眞琴

大槻文彦

諸氏の

ことばのはやし

ことばのりの

言海

辞書

文學史

等ありて前後世に出で文學史には

高津鉄三郎

三上参次

兩氏の(落合直文氏補助)

日本文學史

あらはれ。歴史に

物集高見

田口卯吉

島田三郎

内藤耻叟

氏等の

日本文明史略

日本開化小史

歴史

開國始末

安政紀事

および修史局の

國史眼

出で、史料研究の方法を一變せしが如き亦以て榮華日に高まるの小説界と相呼應しつゝ文學の隆盛を告ぐるを見るに足る。唯他の哲學上の著書に至つては蓋し準備中の時代に屬し二三の小著述は無さに非ずといへども眞の製産を得んことは到底第三期以後に在るべきを信するなり。

國文學の勃興すると共に亦一の影響を史學上に及ぼしたるは考證學の流行なり。従つて隨筆書類は日に愛讀者を増し其出版せらるゝもの亦少なからざりしが最たるものは金港堂の『百萬塔』吉川書店の『百家説林』博文館の『温知叢書』ありとす。

哲學上の著書

隨筆

其六 結論

概して言へば第二期の文學は小説を以て代表せられたり言ひ換ふれば外面を飾るところの浮華なる文學を以て蹂躪せられたり故に眞の文學に至りては深く社會の裡面に潛み世人の注目を惹く事なくして時の來るを待つありしも亦止むを得ざるなり。小説界の繁昌此くの如しといへども是亦觀來れば同じ背丈の人々に富みたるのみにて之に覇たるの月桂冠を有する英雄はと問はゞ恐らくは答に窮するを覺えん。既に覇權の歸する處なし従つて統一を缺くは固より其どころ既に統一を缺けり。其結果として盛衰を一時の流行と共にし確かなる歩みを徐々として進むる能はざるも何ぞ怪むに足らん。さはいへ是亦小説界を吾人が希望するところの理想に達せしむる一段階にして。

一たびは必ず経ざるべからざるの時代なりとすれば決して等閑に冷淡に看過すべからざるなり。第二期の文學は實に綠長短なき春の野邊なりき。平原一面の若草なりき。故に百花爛熳の日に至りては、其生長また雪間に發見せし日と同比例を保つべからず。遂に俄然尺に達し蓄を見するの盛運に向へるは亦勢の然らしむる處なり。而して其勢を然らしめたるは、余が前に述べたる政事および社會の問題と文學との關係その重きに居るものとす。要するに小説は此期の終よりして其性質は漸く變化を生じ、柔弱猥褻なりし文体は雄健なるものと爲り、不健全なる思想の著述は従つて世人に嫌はれんとするに至りぬ。嗚呼時なるかな。今此時に乗じ、小説のみをして専ら文學を代表せしむる能はざるに至れるを喜ぶと共に、余は切に望む。第三期以後に於て眞の文學漸く社會の表面に顯はれ、釣

合よき歩調を以て進み行くの徵候を認めん事を。

(四) 第三期 謂はゆる新聞時代

概論

我國維新後に於ける文學の變遷は、之を概言すれば只一直線をたどり來りて殆んど見るべきの段階なし。蓋し文學上の製産物の以て文學界に時代を作るものなきに因ると謂うて不可ならん。余が大体に於て三時期を分ちたる所以のものは、理論上より言ふ時の寧ろ文學うれ自身の時期には非ずして、文學が外圍事物の刺撃を受けたるに因り、多少の異色を呈したるを見て分ちたるに過ぎず。亦以て其根底の弱さを證明し、外界の波瀾に逆らつて其確乎たる基礎を維持するの力なき事を見るべし。そもく、余は文學と呼ぶところのものをして、もとより或一派の人

の如く小説のみの独占名稱たらしむるを甘んずるものに非ずといへどもさりとて一般學者が含ましむる處の詩歌戯曲歴史哲學其他を悉く指すにも非ず何となれば余が目的は明治年間に於て特に發達したる文學の沿革を述べんとするに止まりて未だ我國の物として同化せられざる直譯的の文學と既に前代もしくは前々代に於て生活を止めたりし古文學の遺骸とに至つては甚だ之を重く見ること能はざればなり此見解を以てする時は余をして小説が明治文學の骨髓たりと言はしむる事の甚しく不當ならざるを知らん第二期に於て余が最も力を小説に盡したるは即ち之が爲めのみ。

然るに世人の小説を待遇するや終始甚だ不深切にして其始めて萌芽し來るや殆んど度外視せし有様なりき而して圖らずも俄然其勢力を得來るに及んでや定見なき世人は直に拍手喝采

して之を歓迎せる可可笑しけれ然れども其歓迎は一時の熱に浮がされしに過ぎざりしかば名譽と奢侈との巢窟たる政事界の出來事が世人の心を誘ふに當つては冷淡にも歓迎したる賓客を見捨てたり一たび見捨てられたる文學すなはち小説は再び昔日の光榮を恢復する能はずして地に落ちたるまゝ第三期を迎ふるに至りしなり然れども余は獨り世人のみを責むるものには非ず外界の毀譽褒貶によつて其方針を左右にする小説家が如何に明治文學の消長に關係したるかは今更言はずとももの事ならん。

願ふに第二期の前半は文學生長の時代にして其後半は壽命短き文學の實を結びたる時代なりき余は明らかに第二期の終と第三期の始を限界する能はずといへども大略を言へば政事上の一大事件たる憲法發布の時を去る二三年の間に文學の世人

憲法發布後
二三年間

新聞紙

の愛顧を失ひしなり。其頃よりして如何に小説の出づる數を減じ、世人が之を歡待する情の冷却せしかは、誰も確かに認むる處ならん。是亦其故なきに非ず。漸く政事上諸般の問題が目下焦眉の急と爲り來るにわたつては、寧ろ贅澤物の傾ある浮華文學は、政事上實用のものに其位置を譲らざるを得ざればなり。政事上實用のものとは何ぞや、新聞紙す亦は是なり。新聞紙は社會一般に大なる關係を有すると共に、自ら文學界に其位置を占めて、然も其間に勢力を恣にするは疑なし。されば政事上の多忙は文學上の新聞紙をして其腕を伸べしむるの機會を得せしめたるや亦疑ふべからず。政事界既に繁忙を極め、社會上の問題を解釋するが爲めに、新聞紙の主義議論が一般世人の心を左右したると共に、文學は獨り此新聞によつてのみ、其存在を社會にあらはさんとするに至りしは、文學の衰微のために哀しまざる

を得ずといへども、一方には未來に於て爲めに文學が如何なる變化を受くべきかを吾人をして豫察せしむるものなり。嗚呼其根底未だ固からざる我國の文學は、嘗て小説によつて代表せられ、今また新聞紙によつて其勢力を維持せんとす。何ぞ危きこと累卵も雷ならざるや。余は世の文學博士、文學學校の教員、講師、耆儒、碩學の人達、如何に社會の裡面よりして文學のために盡す處ありしかは、特に言はず。唯社會の表面にあらはるゝ處の國民一般の見て以て文學と爲すものに至つては、前述の斷定を爲すの止むを得ざるを知るなり。

第三期は憲法發布後兩三年に始まり引いて現今に亘る。呼んで新聞雜誌時代と爲すを憚らざるなり。およる文學に對する世人の眼光が批評的に向へる事は第二期に述べたり。而して最も自由な批評を爲すもの、新聞雜誌に如くものなし。是れ新聞紙の

文學上に益する處殊に多き所以にして亦前期文學の成果に對して批評を試むる

早稻田文學

哲學雜誌

雜誌

等の廣く世に愛讀せらるゝ所以なり新聞紙は必ず現在に伴ふものなるが故に第三期は未だ文學上の製作物を富まざると共に従つて批評の筆また閑なるを見るといへども其狭き意味の文學に對して寧ろ冷淡なると同時に廣き意味の文學を代表する新聞紙としては當期に於て著るしき發達を爲したること余も既に言ひ讀者亦明かに知る處なり請ふ少しく新聞紙に就いて論せん

本年八月の調査によれば全國の新聞紙およそ百九十種其体裁主義に於ておのゝ特色ありといへども要するに猶發達の時

東京大坂の新聞

代に在りて吾人が理想する處のものは一も之なきが如し諺に曰はずや多忙は多望なりと政事界の近年に於ける出來事の多き實に新聞紙を驅つて多忙界中に入らしめたり今や新聞紙は亦前日の如く無智なる世人を相手取るものに非ざるが故に其論説が重き責任を負へると共に深く其研究を要し探訪通信の迅速を要し従つて其正確を期せざるべからず而して世人は四方より八方より眼を刮いで新聞紙を環視しつゝあるが故に其責任の重きを加ふる一方には日に月に多希多望なる位置に立たんとす地方の新聞紙は暫く措き現今東京大坂に於ける新聞紙にして廣く讀まるゝものを擧ぐれば『東京日々』『報知』『時事』『毎日』『日本』『國民』『新朝野』『讀賣』『中央』『國會』『二六』『自由』『東京朝日』『やまと』『開花』『萬朝報』『めざまし』『大坂朝日』『新報』等にして世人が新聞紙を利用するの多きを加ふると共に其

四大新聞

發兌高の増すこと驚くべきの類に達せり。中んづく其記者に健筆の人あるが爲めに著るしき特色を示したるもの四あり。曰く『東京日々』『日本』『國民』『時事』これなり。東京日々新聞は世人が見て以て半官報と爲す處のものにして。

朝比奈知泉

氏筆を執り主義に於ては殆んど滿天下の新聞紙と反對の位置に在るが故に筆鋒頗る銳利を極む其文は漢文体に西洋文体を加へたる論説を見る事多し日本ハ過激なる國家主義を執れる新聞紙にして。

陸實

民主筆たり文体は漢文書き流しに詩人的風味を加へたるものと評すべく悲歌慷慨の情日々の紙上に溢れたり國民新聞ハ主義に於ては日本新聞と正反体の位置に在り執る處は平民主義

にして其主筆たる

徳富猪一郎

氏が耶蘇教に對する信仰と英國風の家族生活を好む事とに原因して紙上には圓満なる趣味を備へたり論説は純粹の西洋風にして(マコーレー)の文体とも評せんか言ひ廻しに巧なるは讀者も知らん以上三新聞と全く趣を異にせるものは時事新報なり其社主が

福澤諭吉

氏にして其社員の多くが慶應義塾出身の人たる事と余が第一期に述べたる福澤氏の學風とを對照し來る時ハ此新聞紙が如何なる特色を有せるか問はずして明かならん其文平易淡泊にして趣味乏しく十の八九實利主義に傾ける事は言ふまでもなき事あり。

今や新聞雑誌が文學上に勢力を有すると共に雑誌社もしくり新聞社より他の方便を以て文學のために盡したる功力は此に特書せざる可からざるものあり民友社が

十三文豪

を出だして歐洲著名の文學家を紹介し博文館が

明治文庫

を出だして小説の餘喘を此時代に維持し經濟雜誌社が

史海

を出だして史學の研究を獎勵し朝野新聞が

千代田城大奥

を載せ讀賣新聞が

大奥の女中

を掲げて徳川時代の史料と與へたるが如きは是なり

西洋學

終に臨んで第二期に遣したりし西洋學の變遷をも聊か此に併せ述べざるべからず始め我國に於て發達の速かりしは英學なる事既に言へり然れども今や政事學法律學もしくは史學の研究漸く隆盛あるに従つて獨乙學は起り來れり殊に本年高等中學の制を改めて或一部に於ては獨佛學を主眼とせしが如き事甚だ小なるに似たれども獨乙學の勃興には與かつて力あるものたるは疑なし其他露西亞語の如き伊太利語西班牙語の如き之を學ぶもの甚だ多からずといへども幾分づゝか開けゆくの今日にあたり最早英學のみを以て昔日の如く洋學と呼ぶの甚だ廣さに過ぐるの感あるに至れり

一たび西洋學の我社會に入るや英學は下よりし獨乙學は上よりせし事亦既に述べたり故に英學の行はるゝ區域は甚だ廣くして現在にも未來にも猶ますます進歩を早めんとす當に其學

新聞紙の將來

の古く入り來りしが爲めのみならず商業に工業に英國は其主動者として世界に立つの原因よりしても必ず榮えて衰ふまじきを豫知するなり。況んや其萬國一般の貿易用語たるに於てをや。獨乙學に至つては四つの方面よりして後來大に著るしき發達を見るあらんとす。其四つとは何ぞ。曰く政事法律。曰く軍事。曰く醫學。曰く美文學。これのみ中んづく政事法律學の研究に於て獨乙が獨り世界中に一生涯を開きたるは人の知るところ。今や我國の政事界は日に繁忙に越き加ふるに法典編纂の事あり。日清間事件の結果よりして國際公法其他政事上の關係極めて多からんとす。されば獨乙學の隆盛を目前に見るは讀者も期して待つ處ならん。

今此に余が諸君と紙上に別るゝにあたり第三期を代表せる新聞紙の未來に於ける希望を述べて以て筆を收めんとす。そもも我新聞紙の過去に在つては是こそ東洋一獨立國の新聞紙なりとして世に示すべきもの無かりしを悲しむなり。實に其資本に乏しきと事業の經驗に薄きとに基きて肝腎ある我東洋の形勢をも遠き西洋の新聞紙より轉載するを常例とし其發達といふも範圍極めて狭かりしを嘆くなり。然るに近年又至り政界頗る繁忙なると共に其論説は深く研究を加へ來り殊に日清間の關係一たび破れて謂はゆる東洋のバルカン半島(朝鮮)は其獨立を我義俠心に任すに至り歐洲強國をして之を世界の權力平均を破るものと見るの猜疑心を生せしめしより我日本帝國の新聞記者は自ら進んで東洋の形勢を探知せざるべからざるの位置に立てり。此に於て從來依つて以て確報の根據としたる西洋諸新聞の頼むに足らざるを覺破せしが故に今日以後に於ては新聞紙は新聞紙としての覺悟を以て將來に斷乎たる方針を執

らざるべからざるの決心を爲すに至りしは、日々紙上に注がれたる各社記者の熱血以て之を證すべきなり。探訪に論説に、其世間を觀察し又世間に忠告するに於て極めて重き責任は、日に其頭上に加はり來らんとす。東洋の天地平定するの時にあたり、以て我大日本帝國を代表せしむるに足るべき一大新聞の出で來らん事、當に余が文學界のために期して待つのみならず、抑も我大日本帝國のために吾人國民の希望に堪へざる處なり。

明治文學史 終

明治廿六年十二月廿五日内務省許可
 明治廿七年十月廿七日印刷發行

定價金拾貳錢

編輯兼 發行者 大橋 新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 野村 宗十郎
京橋區築地一丁目二十番地

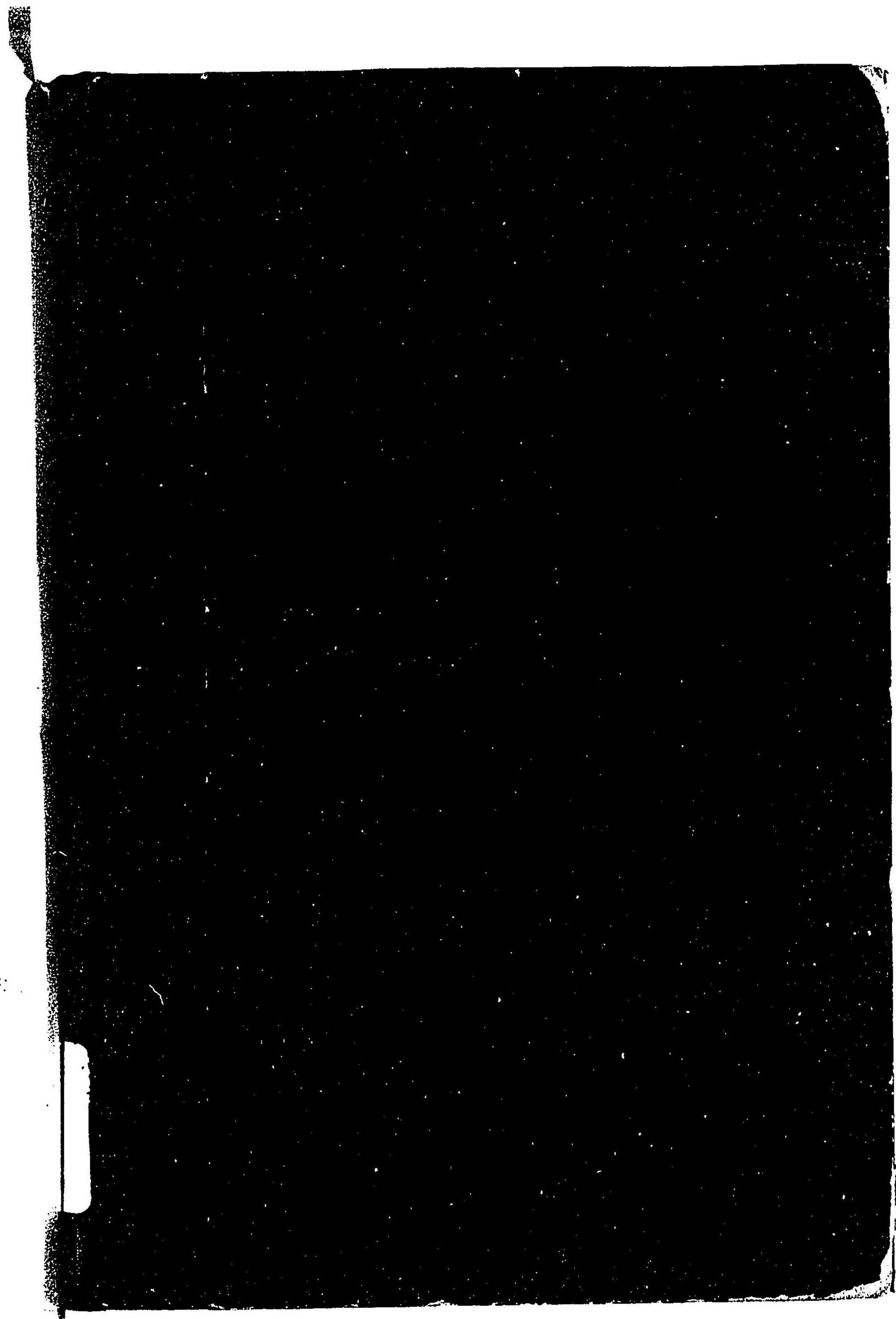
印刷所 株式會社東京築地活版製造所
京橋區築地二丁目十七番地



東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

70
288



70
288

084996-000-0

70-288

明治文学史

大和田 建樹/著

M27

DBB-0426



